

2024（令和6）年度 京都大学 入試問題 文系 第1問 解答例

*1行は約25文字（+句読点などの記号）。20字程度とすべきだと主張する人もいる。

問一

異言語の学習者が、母語に規定された自己の存在感が希薄化して解放され、新たに異言語を母語と同様に受容できる段階に達した時の、不可解な多幸感により恍惚となる状態。

問二

本気を出せることを進路選択の最重要基準とし、さらに他の選択がない状況を求めて、迷いを払拭したいという心情。

問三

母語によって早くから規定され、既知の平凡なものとなっていた事物の認識が、異言語の学習を始め、学習者が新しい言葉を一つ一つ覚えるたびに改められていくということ。

*「異言語の学習者について」「(事物、世界の) 新たな・認識を得る」が必須。

*「言葉に新しい名前がつく」のではない

問四

『祈り』は、風変わりで意味不明瞭だが、魅力があり、語の辞書的で自明と認識される意味を再考させる点で異言語学習にも通じる。正しい解釈を追求しても決して得られないが、言葉と意味が一致しないからこそ感じられる面白さがある（と筆者は考えている）。

問五

『祈り』は、「持たざるもの」を求めていながら、「賢い者」「幸せな者」に不要な「頭」「金」を、また、「臆病者」にはもてあます「馬」を、各々求めている。したがって、詩の言葉の意味の核心は、言葉同士の関連性を追究しても、定義の違いや常識的な固定観念への皮肉等とは言えず、一義的な解釈に達しえないと思われるから。